

頼られることに喜びを感じつつ、 新時代の難病医療に取り組む。

【医療人インタビュー】

医療法人博慈会 石田消化器IBDクリニック 院長
(大分県大分市)

石田 哲也



2016年11月、JR大分駅すぐ近くに開業した医療法人博慈会石田消化器IBDクリニック(以下、石田消化器IBDクリニック)は、難病指定されている炎症性腸疾患(以下、IBD)の名医として知られる石田哲也氏が、高い専門性を明示してスタートさせた消化器内科クリニックだ。開院して3か月で、患者数は300名以上。同院を頼って門を叩く新規患者も日に増えている。

文清水洋一 写真タカオカト彦

難病に苦しむ患者さんの存在を知り、画期的な治療技術の確立に触れ、IBDを生涯のテーマに据える決心を

石田氏は、IBDという疾患との運命的な出会いを振り返る。

「私が米国留学を終え、大分医科大学(現大分大学医学部)医局に復帰したのが1999年です。2002年に、いわゆる生物学的製剤の一つである抗TNF- α 抗体製剤が登場し、IBD医療に大変革が起こりますが、留学中にマクロファージの研究に取り組んでいた私にとって、マクロファージと強い因果関係をもつTNF- α 抗体をターゲットにした製剤にとっても興味をもちました」

製剤との出会いの前には、患者さんとの出会いがあった。

「帰国してすぐに、入院で重篤なクローン病(IBDは主に、クローン病と潰瘍性大腸炎の2大疾患をさす)の患者さんを受け持ちました。

受け持った当初は、あまり効きめが期待できない治療方針しか提示できませんでしたが、生物学的製剤の登場により寛解の期待がもて、患者さんにも選択肢を示せるようになりました。この大変革は、患者さんにとって朗報で

あるのはもちろんですが、私たち医療者にとっても、それまでになかったモチベーションの根源になりました。

『治せない』病気が『治せるようになる』のは、医師にとって大事件なのです」

帰国後に臨床医としての専門性を模索していた石田氏は、そういつたきっかけを経てIBDへの取り組みを強める意志を固めていく。

「難病に苦しむ患者さんの存在を知ったこと、造詣のあったTNF- α 抗体がターゲットとなる製剤が活躍するようになったこと、そして、寛解の期待ができる治療法が確立したこと。それらが相まって、私のIBDへの興味は強くなっていました」

医師人生を賭けるに足るテーマに出会えた幸運を、噛みしめている様子だ。

「ほかにも、白血球除去療法やカルシニューリン阻害薬など、刮目すべき療法、製剤が次々に登場し、IBD治療の選択肢が一気に広がった時代でもありました。そんなタイミングでこの疾患に取り組むチャンスを得たことは、医師としての幸運を感じずにはいられません」

幸運なこととはもう一つあるという。「私たちの世代は、生物学的製剤以前と以後の両方を体験しています。画期

的な製剤の登場以後の医師のなかには、『バイオを処方すれば治る疾患』という程度の認識の人も多いかもしれませんが。

難治性疾患に苦しめられ、振り返された患者さんの苦しみを知ったうえで、現在の特効薬のある時代に診療する私たちの世代は、より患者さんに寄り添えるのではないのでしょうか。この疾患に取り組むには、スキルだけでなく、患者さんの一生とともに生きる、という気概が求められると思います」

断らない方針を堅持し、患者さんからの信頼を得て九州でも指折りの専門医に

そして、2003年に入職した大分赤十字病院の消化器内科を舞台に、石田氏のIBD医療が実績を重ねていった。

「とにかく、断らない方針を守り、どんなに重篤な患者さんでも、どこから来られた患者さんでもすべて受け入れました。『どんな症例でも、来い!』と思いつながり臨床に取り組んでいましたね」

その結果、県内だけでなく、北は北九州、南は宮崎からも患者さんがやってくる九州でも有数のIBD医



医療法人博慈会
石田消化器IBDクリニック

〒870-0823 大分県大分市東大道1-3-1 アクロスプラザ大分駅南2F

診療科目 : 消化器内科(胃、腸、肝臓)、一般内科

受付時間 : 9:00~12:00、13:00~18:00

休診日 : 月曜午後、金曜、祝日、年末年始

T E L : 097-529-5777

<http://shidaibd.com/>

療の拠点となっていた。

「治療法の進展とともに検査、診断技術も進歩し、患者さんも増える一方でした」

評判が口コミなどで広がり、カルテ上の患者数は400名を超えるまでに。断らない医療に加えQOL向上を最優先する診療方針が、患者さんからの信頼につながっていった。そしてQOL向上が信念として確立すると、そこから新たな課題が生まれたのだ。

「IBDは、働き盛りの年代に多くみられる疾患です。一方、この疾患の有効な治療法である生物学的製剤のなかでも、処方頻度の高い薬の一つがインフリキシマブです。専門スタッフが常駐する化学療法で、所要時間2〜3時間の点滴投与を定期的

に受けなければなりません。大分赤十字病院は土曜・日曜が休診のため、患者さんの多くは多忙な平日に仕事を休んで点滴を受けてい



大分駅から徒歩1分のアクロスプラザ大分駅前。今後もクリニックが増えていく予定。

たのです」

患者本位を貫きさらにQOLを向上させるには、土曜・日曜に点滴ができる体制が必要

患者さんのこの負担を減らせば、QOLはもつと上がる、との思い。つまり、土曜・日曜に点滴を受けられる体制をつくりたいという願いが石田氏のなかで日増しに強くなっていった。開業という選択肢が、脳裏をよぎる日々が始まったのである。

「開業は、医師である私にはメリットもリスクもあります。そこを見極めるために煩悶しましたが、視点を変えて患者さんの立場になってみると、メリットしかないことに気づきました。患者さんのQOL向上が確実な土曜・日曜の点滴実施。それが叶うならば、医師としてのリスクがあっても後悔はない。いつしかそう思えるようになりました」

具体的な検討を始めて約1年で決断した開業。まず着手したのはパートナー探しだった。

「当時、私は大分赤十字病院の消化器内科診療部長を務めていました。多忙な日々のなかで、とてもではありません

んが、独力で開業準備などできませんでした。

そこで私は、信頼できるパートナーを見つめるために複数のコンサルティング会社から企画案と見積りを募りました。結果、もつとも説得力のある提案を示してくれた総合メディカルさんをパートナーに選びました」

そして2016年11月、JR大分駅の南側、駅ビルの至近に立地する商業ビル「アクロスプラザ大分駅前」2階フロアに石田消化器IBDクリニックが誕生した。

「ビルクリニックはどうしても手狭になるだろうと覚悟していましたが、総合メディカルさんの関連会社であるソム・テックさんが大変良い仕事をしてくださり、機能的で大満足の設計となりました」

特殊な薬剤が多く専門性の高いIBD医療に、院内・院外の連携体制は欠かせない

内装は建築家である弟さんの手によるもの。木目を基調とした色彩計画が素晴らしい仕上がりで、患者さ



石田 哲也(いしだ・てつや)

- 1994年12月 大分医科大学大学院卒業
- 1995年 1月 大久保病院勤務員
- 1995年 4月 ルイジアナ州立大学医療センター(生理学)研究員
- 1996年12月 オハイオ医科大学(生理学)研究員
- 1997年 6月 山香町立国保総合病院(現・杵築市立山香病院) 内科医師
- 1999年 6月 大分医科大学 内科第一 医員
- 2002年11月 大分医科大学 内科第一 助手
- 2003年 9月 大分赤十字病院 消化器科 医師
- 2004年 4月 大分赤十字病院 消化器科 副部長
- 2005年 4月 大分赤十字病院 消化器科 部長
- 2016年11月 医療法人博慈会 石田消化器IBDクリニック開院

んからの評判も上々とのこと。

課題であった点滴室は個室を2名分、半個室のユニットを2名分の計4名分確保。レントゲン室、血液・尿検査室、超音波検査のコナーはもとより、最新設備を完備した内視鏡検査室を設けることもできた。診察室には、電動でフルフラットの診察台になる患者さん専用チェアも完備した。

「IBD医療には、力量ある専門スタッフも欠かせません。熟達の看護師や、保健師、内視鏡技師、糖尿病療養指導士、肝炎コーディネーターの有資格者を配置したサポート体制を築くことができました。ともに常に最善で最良の医療を提供していきたいと考えて



点滴に使用する化学療法室は4名分確保(左)。最新の設備を導入した内視鏡検査室(右)。

います」

今後は他科の医療機関も参画し、クリニックモールとして発展する予定の同ビル2階フロアは、2017年2月現在、石田消化器IBDクリニックと「そう、こう薬局」がある。調剤薬局も石田氏には欠かせないパートナーとなっている。

「IBDで処方する薬剤、製剤はほかの診療科ではまったく馴染みのない特殊なものばかり。同時にオープンしたそうこう薬局の薬剤師さんと日常的にやりとりをしながら、当クリニックから出る処方せんに万全の対応をしてもらっています。

ある時期に一段落した生物学的製剤の新薬ですが、2017年以降にいくつも登場する予定です。そんな時に、専門知識をもった薬剤師がすぐそばにいてくれる体制は心強いですね。薬剤師のみなさんとは、今後、薬剤に関する勉強会を開きたいと思っています」



木目を基調とした待合室と受付は落ち着いた雰囲気。スタッフの働きやすさも考慮されている。

診察や治療以外のやりとりも厭わず、患者さんの心の支えになれたら本望

準備万端のクリニックをオープンした今、石田氏がめざすものは――。

「一義的には、土曜・日曜にも診療し、働き盛りの患者さんのQOL向上に寄与し

いかにIBDに実績のある専門医が院長とはいえ、名称に「IBD」を明記しているクリニックは全国的にも稀だ。その点を質問すると――。

「たしかに、大いに悩みました。クリニックとしては、消化器内科のその他疾患にも対応すべきですし、実際にそうしています。

IBDを看板に掲げると、『よくわからない専門領域のクリニックのよう』と敬遠される危惧は拭えませんでした。ただ、それよりも、IBDに苦しんでいる多くの患者さんに、『ここに専門家がいます』ことを知っていただくことを考えました。思い切った決断をしてよかったですと感じています」

たい。これはすでに実行しています。さらに大きな方針は『頼られるクリニックになる』ことです。治療上のテクニカルな部分で最高の医療を提供するのはもちろんですが、治療、診察以外の部分でも患者さんの心の支えとなるような存在をめざしています。

たとえば、生物学的製剤には自己注射で投与できる製剤もあります。ほぼ2か月に1度、専門家立ち合いのもとで点滴しなければならぬ別の製剤に比べ、2週間に1度、自分ひとりで注射できる製剤ですから、全国的には就労年齢の患者さんからの支持は圧倒的に高い。ところが、大分県ではそれがほぼ逆転しています。医療に関しては、医師を頼りたいという県民性なのだと思います。なんと、自宅で自分ひとりで注射できるにもかかわらず、『注射はクリニックに行つてしてもらいたい』という方が多数いらっしゃるのです。

私は微笑んで、そういった要望を受け入れたい。事実、多くの患者さんが注射をしてもらいに来院されます。自宅でもできる注射のために、わざわざ来院してもらおう。一見、不合理で非効率に見えるが――。 「たしかに、不合理で、非効率です。

三省堂書店 医学書担当の
おすすめの本



このコーナーでは、ドクターの皆さまへ
三省堂書店がおすすめする
医学書をご紹介します。



かぜ診療マニュアル
第2版

山本舜悟 編、守屋章成 他著

医師になったら誰もが診ることになる「かぜ」。しかし、「なんとなくのかぜ診療」をしていませんか？ 小児のかぜは？ 妊婦のかぜは？ そもそも「かぜをひいた」と言って来た患者さんは本当にかぜですか？ 初版から150ページ以上増量した、待望の第2版。

出版社名 日本医事新報社
価格(税込) 4,320円
I S B N 978-4-7849-4401-9
判型/頁数 A5判/416頁
発行年月 2017年2月



脳卒中外来

荒木信夫 総編集、棚橋紀夫 担当編集

日本人の死因の第3位、患者数150万人、神経内科外来で最も患者数の多い脳卒中。脳卒中の基礎知識から外来の基本的な流れ、診断と治療、最新のトピックスまで、脳卒中が疑われる患者さんを診るときに役立つ知識がこの一冊に。「神経内科外来シリーズ」の5巻目。

出版社名 メジカルビュー社
価格(税込) 8,640円
I S B N 978-4-7583-0386-6
判型/頁数 B5判/324頁
発行年月 2017年2月



そのまま使える
災害対策アクションカード

吉田修、横田耕治、加藤之紀、小尾口邦彦 著

病院にとって避けては通れない災害対策。しかし大規模なマニュアル制作は困難なうえ、実際の現場では使い勝手が悪いことも。現場のスタッフがやるべき各自の担当(アクション)のみを簡潔かつ具体的に記したカードを作ることから始めよう。テンプレートを収録したCD付き。

出版社名 中外医学社
価格(税込) 4,104円
I S B N 978-4-498-06690-8
判型/頁数 B5判/174頁
発行年月 2017年2月

月間医学書ランキング (三省堂書店 神保町本店調べ 2017/2/1~28)

順位	タイトル	著者	出版社名	価格(税込)
1	今日の治療薬 解説と便覧 2017年版	浦部晶夫、島田和幸、川合眞一 編	南江堂	4,968
2	治療薬マニュアル2017	北原光夫、上野文昭、越前宏俊 編	医学書院	5,400
3	今日の治療指針 私はこう治療している 2017年版	福井次矢、高木誠、小室一成 編	医学書院	16,200
4	臨床検査データブック 2017-2018	黒川清、春日雅人、北村聖 編	医学書院	5,184
5	糖尿病治療ガイド 2016-2017	日本糖尿病学会 編	文光堂	864
6	のほほん解剖生理学	玉先生 著、大和田潔 編	永岡書店	1,598
7	かぜ診療マニュアル 第2版	山本舜悟 編、守屋章成 他著	日本医事新報社	4,320
8	死にゆく患者と、どう話すか	國頭英夫 監修、明智龍男 著	医学書院	2,268
9	QUESTION BANK 総合内科専門医試験予想問題集	医療情報科学研究所 編	メディックメディア	8,640
10	ここが知りたい! 糖尿病診療ハンドブック Ver.3	岩岡秀明、栗林伸一 編著	中外医学社	3,888

お求めは下記の三省堂書店医学書取り扱い店舗でどうぞ

神保町本店 03-3233-3312 新横浜店 045-478-5520 札幌店 011-209-5600 旭川医大売店 0166-68-2773
有楽町店 03-5222-1200 大宮店 048-646-2600 名古屋高島屋店 052-566-8877
池袋本店 03-6864-8900 そごう千葉店 043-245-8331 東京女子医大店 03-3203-8326



診療を終えて和やかな雰囲気スタッフたち。

でもそれで、いいのです。IBDは、いまだに原因不明で完治は難しい難病です。一生の付き合いを覚悟しなければならぬ。そんな時、『あそこに行つて注射してもらえば、なんだか安心だ』と思える、頼れるクリニックがあるのはいいことだと思えます。そういった患者さんの心の支えがQOL向上につながると思っています」

後進育成を継続し、患者会にも心を砕く。大分県のIBD医療の現在と未来に思いを馳せる

大分赤十字病院は円満退職。現在も、IBDに関する病診連携の要として互いに信頼を託す関係となっている。毎週金曜のクリニック休診日には、非常勤医師として大分赤十字病院に足を運んでいる。

「目的の一つは、在職中に担当した患者さんを継続して診るため。もう一つは、同院に残った後進の医師たちを引き続き教育するためです。IBDはたくさん患者さんがそれぞれに長く闘い、付き合いなければならぬ疾患です。ということとはつまり、医療を提供する側も、たとえば専門家が私一代限りといったことではいけません。次の

世代に知見を継承し、20年後にも、50年後にもしつかりとしたIBD医療が展開されるようにしたいと思っと思っています」

IBDは日本全国に患者会があり、患者間の情報共有、交流が盛んな疾患でもある。石田氏は、大分県の患者会「大分IBD友の会」の顧問を務めている。

「定例会には必ず呼んでいただき、講演をしています。その折に多くの患者さんの顔を見られるのが楽しみです。情報交換したり励まし合ったりして前向きに生きていく姿に触れ、私自身も励まされているように思います」

天職に出会った？ との質問には、即答があった。

「そう思います。もうIBDに取り組んで10数年になりますから、10代で発症した患者さんが病氣と闘いながら成長して立派な社会人になった姿を見ると感慨深いものです。無事に出産できましたと報告に来てくださる方もいます。」

そういった治療、診断から離れた出来事も含めて、すべてが気に入っています。素晴らしい仕事に出会えた、心から感謝しています」